

令和5年度(2023年度)第2回真庭市図書館協議会

と き：令和6年2月27日(火)午後5時～7時

ところ：真庭市立中央図書館 3階会議室

出席者：浅田祥子委員、大岩功委員、清友久美子委員、清友健二委員、庄司憲子委員、
内藤貴嗣委員、廣瀬正明委員、松尾敏正委員、山本信子委員、
吉野奈保子委員

事務局：西川正、佐藤弘敏、上杉朋子、横山衣未

1. 開 会

○事務局

定刻になりましたので始めます。令和4年5月20日から2年間の任期で委員をつとめていただきました。任期まではまだありますが、本日がこのメンバーでは最後の会議となります。

今回は資料の送付がぎりぎりになりまして申し訳ございませんでした。資料1から4までを事前にお送りしております。当日資料として、次第、前回の議事録、「真庭市立図書館・一年間のマネジメントサイクル」をお配りしています。なお、これまでの協議会の議事録や資料は前回のものもあわせて、すべて図書館ホームページに掲載しております。本日の会議資料も掲載して参りますので、よろしくお願いいたします。

では近況報告とおすすめ本の紹介から始めます。私から初めて時計回りをお願いします。

2. 報告・協議事項

○事務局

ここからは、真庭市立図書館条例施行規則により、清友委員長に進行をお願いします。

(1) 令和5年度各館の重点取り組み予定・計画について進捗報告

○委員長

事務局から配布されている「真庭市立図書館・一年間のマネジメントサイクル」を見てください。今回の図書館協議会は年度の2回目です。各館の図書館そだて会議の報告と、本年度の活動の中間報告、計画にかかわる評価指標の数値を見せてもらい、われわれが来年度の活動について意見を言ったり、あらたな取り組みに向けての提案をしたりしていく会議になります。

では各館が今年度重点的に取り組むとしたことの進捗状況を事務局から報告してもらいます。

○事務局 資料 1-1 から 1-7 により説明

○委員長

ありがとうございました。ちょっと資料が多いので、みなさんのご意見を聞くのも少し時間を置いたほうがよさそうです。次の(2)のほうもざっと説明していただいて、あわせてそれぞれにご意見をうかがうことにしてよいでしょうか。

(2) 図書館運営評価について

○委員長

「図書館みらい計画」にそって図書館を運営していく際の評価指標として、真庭市立図書館は3つの指標を設定しています。1つめは、実貸出利用率、2つめが市民、団体、学校との協働事業の内容や開催数、参加人数の変化、そして3つめが市民による評価点と課題ということで、図書館そだて会議やこの図書館協議会での図書館と市民との率直な意見交換による定性的な評価となっています。では事務局から説明をお願いします。

○事務局 資料2、3、3-1、4により説明

○委員長

事務局から示されたデータをもとに、真庭市立図書館の運営状況について、「図書館みらい計画」に沿った運営がなされているか話し合ってください。

○委員

来館者が増えたのに貸出は増えなかったとのことでしたが、実貸出利用率というものはほかの自治体と比べてどんなものなのでしょうか。30%は野心的だなと思いました。その根拠的なものはあるのでしょうか。

○事務局

「真庭市図書館みらい計画」を策定した時に、計画策定委員会の委員長をしていただいた元瀬戸内市民図書館長だった嶋田学先生が、瀬戸内市民図書館の開館の際の「瀬戸内市としょかんみらいプラン」のなかで「全国的な統計では、実貸出利用率が30パーセントを超えれば、比較的水準が高いとされている」として、当面の目標とされていました。嶋田先生にうかがったところ、30%を超えているのは、たとえば千葉県の浦安市の図書館だそうです。

図書館の運営を測る指標としては、年間の貸出冊数や市民一人当たりの貸出冊数などを用いることが多いのですが、それよりも、実際に市民が一度でも図書館の資料を貸出利用したかを見るこの実貸出利用率を用いたほうがいいとのことでした。

昨年度、協議会で近隣の図書館は何%なのかと質問が出てデータをお示しました。瀬戸内市で2019年度実績が16%くらいでした。

○委員

ちなみに全国平均はどのくらいですか？

○事務局

この指標を使っている図書館はあまりないようで、分かりません。

○委員

わたし個人的にはあまりこの数字は意味がないのではと思っています。というのは、わたしは古い人間のせいか本は書店で買う、図書館で借りるものという思いがありますが、今は電子書籍や朗読アプリもありますし、図書館で借りないけれど書架にある本をその場所でぱらぱら見ると

いうことも多いですね、こういったことを考えると、結局、市民が本に親しむ方法がさまざまあるなかでこの数字はどうなのかなと、分からなくて。もちろん市として、これだけ蔵書を増やしているのに借りる人がいないということは予算投下した意味がないじゃないかという議論になってくるのであれば、それはそれなのですが。

たとえばアンケートの中では、図書館は居心地がいいということをおっしゃっている人が多いですね。図書館に来てホッと一息できるとか、そこで誰かと会えるとか、本を手にとったり雑誌のバックナンバーを見てコーヒーを飲めるとか、そういう場としての魅力みたいなものが真庭の図書館にはあると思うのです。そのことを市民はいいと思っているし、もっとそうなりなと思っていて様子がアンケートからはうかがえるわけです。実貸出利用率の数字だけ見るともう一息がんばらなくちゃいけませんねと言いたくなるじゃないですか。でも、今後、高齢化が進んでいくと、図書館に足を運べない人が増える可能性もあり、実貸出利用率はさらに下がるかもしれませんよね。そんな中で、その数字だけを重視すると、図書館の存在価値が正しく評価されない気がします。真庭市の図書館は、単に本を貸し出すだけではなく、多世代の居場所、あるいは市民交流の拠点として、さまざまな機能や活動があり、工夫がある。そうした実態を把握するために、実貸出利用率を重視するのは、図書館が目指すものとちょっと違いますかと。そこをうまく評価するための指標があればいいなと思います。

○委員長

たいへんごもっともだと思います。

○委員

以前、学校の図書館で地域の人が借りることができるという話がありましたが、そちらの進捗はどうなっていますか？図書館に行けない、家からでは歩いて図書館に行けない人でも学校だとまだ近いから。

○事務局

学校の図書を借りるということは学校の判断で可能ではあると思います。それを図書館のほうでこうしろとは言えないと思っています。一般の利用者向けではないのですが、公共図書館と学校図書館の蔵書管理システムを連携させましたので、児童・生徒が学校図書館から学校司書を通じて公共図書館の本を取り寄せられるようになります。

○委員

大人が学校図書館を利用できない理由を教えてください。

○事務局

利便性もあると思うのですが、公共図書館と学校図書館とは別のものになりますので、学校の本をわれわれ公共図書館のほうから貸せるとか貸せないとかは言えないと思っています。学校のほうで、一般の方に貸し出しをするという事を否定するものではありません。

○館長

委員の意見にもありましたが、図書館の役割に対する議論なのだと思うのですよね。以前は読

書の推進というのが一番で、本を読むということが人の生活にとって豊かになるということなのだと言われていた。だから図書館を作って図書館がたくさん本を貸し出すことで豊かになりますと言っていた。この部分は変わらないと思うのですが、みらい計画ではそこに人の交流の場であるとか、さきほど委員が言われたような役割みたいなものもこれから大事になってきますよというのを足してきたところなのですよね。

柱1の「公共図書館としての存立基盤の整備」に関しての今年度のトピックが、公共図書館と学校図書館に新しい蔵書管理システムを入れて、公共図書館までは来ることができない子どもも学校で公共の本を取り寄せて借りることができるようにしました。これは単純に利便性を上げるということではなくて、学校図書館にいる学校司書と子どもがやりとりをしながら、こんな本もあるよと読書の世界を広げるイメージをいちばんに考えています。これがみらい計画の柱の1と2にあたるようになります。さらに計画の5年間の評価を踏まえて、さきほど委員が言われたような居場所としての機能をもっと強めていくのか、あるいは図書館の基盤を整えるところをまだまだ重視してやっていくべきなのかといった議論をみなさんにさせていただいて、次の計画に生かしていくようになるのかなと思っています。

○委員

檜邑小学校は学校図書館を地域開放しています。ただし学校図書館にあるのは児童向けの本です。大人の方が読みたい本がない場合もあります。児童の本でも読みたいと言われる方がきてくださっています。ただし利用はそれほどありません。いま4名の方が定期的に来られていて、5月から始めて貸出冊数は4～50冊くらい。学校司書と相談をしながら、どれくらいの冊数なら貸出してよいかなど、児童優先で決まりを決めて運用をしています。

話は戻りますが実貸出利用率について。学校に図書館から定期的に本を貸していただいています。子どもたちはこの本を家には持ち帰らず、学校で読んでいます。こういった利用は実貸出率には入りませんよね。でも小学生はそのようにして公共図書館の本にとてもよく触れています。

○委員長

本来、学校図書館は児童生徒、教員向けの図書館なので、教育的なゆとりがあって支障がない限りは地域開放に積極的に取り組むということになっています。これは各学校の裁量になるので、公共図書館側から地域開放どうですかとは言いにくいということですね。さきほどの檜邑小学校のような取り組みも、学校と公共が相互に蔵書検索ができるようになり、どのくらいの規模のものが利用できるか分かるようになったので、もっと違うかたちで利用が進む可能性はありそうですね。

学校での児童や生徒の利用が実貸出利用率に反映されると一番いいですけども、団体貸出という形で利用されているのでは難しい。でも、子どもたちにとっては図書館とか読書の距離は近いということですね。

○委員

蒜山図書館の図書館そだて会議の資料で、カフェイベントみたいなものが開催されたということですが、これはどういうきっかけで、どんな取り組みの中で行われたのですか？

○事務局

始まったきっかけは詳しく分かりませんが、月に一回「としよかんであそぼ」というイベントを定期開催するようになり、これに合わせて旅人食堂さんが出店されているようです。おそらく、湯原図書館でカフェイベントを企画した館長が異動で蒜山図書館の館長となったので、湯原と同

様、蒜山でも開催するようになったのだと思います。

○委員

プレゼンとかするのであれば本をドバッと借りて調べたりするので、冊数が伸びるんじゃないかと思うのですよね。そういうものがなくてただ読むだけだとなかなか貸出冊数は伸びないと思うんですよ。もっとプレゼンの場、小さくても発表する場をいろんなところで作ってあげたらいいと思う。ネットでは調べられないことっていっぱいあると思うんです。それで図書館の利用は伸びると思います。

図書館というのを共感の場にしていかないといけないのではと思います。今までは作者と共感する場として本を読んでいた。ここでは映画をやって、おしゃべり会をやったりしますよね。ぼくは映画を観てもほとんど理解できていないんじゃないかともやもやする。Zoomの講演なども、一人で見るんじゃなくて、ほかの人はどう思いながら聞いているのか知りたい。こういうのを図書館でやってもらってみんなで見たいなと思いました。この間は休館日でだめでしたけど。みんなだみて、しゃべって共感したい。一人で見ていたら、難しくて分からないとあきらめてしまう。図書館でやったらいいと思う。

○委員長

よく分かります、共感をする場ということですね。柱でいうと4番、5番ですね。実貸出利用率については、1割ということで人口41,583人のうちの利用者数が4,229人。新規利用者を開拓するというのは、みらい計画があと2年ということで、このあたりで結果を見ながら次の計画の中に利用率もしくは貸出というものを今の時代の図書館としてどう捉えるかが課題になるということでしょうかね。

とはいってもみらい計画を作ってから、どんどん時代が変化している、その中で地域の図書館としての役割は様々になっています。ただ図書館の基本として地域や市民の財産としての様々な資料をどんどん活用していただきたいという路線はもっておきたい。その辺も考えていたけらと思います。

○委員

いろいろ思うところはありますが、良かったことと苦言をお話しさせていただきます。要点は3つです。まず一つは、この1年間アフターコロナで活動に制限がなくなったとはいえ、仕事柄、市民の過ごす時間帯が明らかに変わっていて、動きも鈍いと感じます。そんな中で私はとても嬉しいことを耳にしたのは、西川館長を褒めることばをたくさん耳にすること。もちろん、「なんじゃこりゃ？」と思うような事業もありましたけれど、とても新鮮で、「これを図書館でするの？」っていうのも正直あったのですが、いろんな種類のイベントや新たな企画をどんどんされて、小学校とか各地で講演をされて西川ファンがすごく増えている。これが滋賀県まで繋がったらすごいことになるんじゃないかと思う。西川館長のような素晴らしい方が真庭にきてくれて、これからの図書館でイベントとか企画、そして楽しいこと、遊ぶこと、遊ぶところ、時間など、西川館長がテーマにされているようなことでこれからは楽しみだなと思いました。わたしもいくつか参加したいなと思ったものもありました。本は借りないですが図書館の建物にはちょいちょい出入りさせてもらっていますので、委員としてかかわった機会を大切にしたいなと思いました。

それから先ほどから出ている実貸出利用率は、以前の会議でも発言しましたが、今回の資料1-1から1-7にも出てこない、なぜ出てこないかを勝手に分析してもらいました。市民がそれぞれの図書館、どこでもいいので1度でも行って借りたかという比率ですよね。市民の枠組みがない

ので、例えば中央図書館が勝山地区の人 50%集めるぞというものではない、仮に 50%集めたところで、市で考えると当然 10%の数が 18%になるかなというくらいですよ。ということで、それぞれの館の司書さんたちはどちらかというと市民・団体・学校との協働事業の参加人数、イベントの企画数やそだて会議・そだち会議の重要性に傾く傾向にある。決して努力してないわけではないけれども、この数字を上げるというのは非常に難しいし、館ごとに競うわけにもいかないという事情があるから、この数字を決めたのが悪いなと思っています。

ただ、評価の一つの数字に過ぎないので、30%をめざしますと言っているだけであって何年後に 30%にしますとは一言も書いていないわけです。ということは、この数字に固執せずしっかり市民に必要な図書館が今ここにあるよ。何か人が集っていて楽しそうな場があるよ。そういう一人一人の参画する意識の変革が出てくれば図書館が存在する意義が十分あるのではと思いました。

3点目になりますがこの資料 1-1 から 1-7 のフォーマットが悪いです。なぜなら、貸出利用率のことは当然単館では書けないので出てこないのは仕方ないにしても、市民協働事業数、参加人数は別の資料にしてただやったことを報告している。たとえば一つの事業について、何人呼ぼうと思ったが何人しか来なかった。じゃあ何が足りなかったのか、今後ここを改善したいというような次に繋がるような話がここに載っていない。数字がほとんど出てこない。そういう情報があると、そだて会議でいろんな人たちから意見を集めることができるんじゃないかな。

5つの柱について、こういったことをやろうと思って、やってみただけ参加人数が思うように増えなかった。それは対象者を絞りきれなかったからとか、開催日や時間が悪かったとか、天候が悪かったとか、いろんなことが出てくると思うんですけど、そういったことをこのフォーマットに落とせるようになれば、もっとそだて会議に来た人たちも意見をしやすくなると思うし、それぞれの町がもっと連携を密にして活動していけるんじゃないかなと思いました。

あと、わたしがたいへん危惧しているのは、去年の新生児が 200 人を割ったということです。この町で私はどうやって商売をしたらいいかとほんとに痛感しています。しかしながら真庭は住みやすい場所というイメージもありますので、ぜひとも西川館長と交流定住センターなどにも今後も活躍していただければと思いました。

○委員

さまざまな図書館でいろんなイベントを企画されてすごいなと感心しました。そういった中でさきほどから数字の問題がたくさん出てきているのですが、私は数字にしばられるといけなと思っています。ただ目標としてもっておくのはいいと思います。図書館の存在感というのは豊かな時間、インテリジェンスあふれるような豊かな時間を心安らかに過ごすこともできるということ。これはすごくいい価値観だと思います。だけどそれはなかなか数字では計れない。でもあえて数字をうまく利用してアピールしていくのであれば、来た人たちの満足度をアンケートで取ってみて、何が良かったとかこんな楽しいイベントだったよというのがあれば、それを発信していく。たぶんすごくいい感想がでてくると思うんですね、これだけ実践しておられたら。そういったものを発信して行って、次はもう一人二人でも増やせたらいいねというような形にしてはどうでしょう。数字はうまく利用して、やっておられることをうまく発信していかれるといいと思います。とてもよく頑張られていて素晴らしいと思います。

○委員

私は真庭市の子どもたちによみきかせをしているのですが、一人でも本好きな子になってほしいな、本が大好きという人が増えたらいいなと思っています。いろんな企画をされていますが、図書館に行ってみたら楽しいよ！というのがやっぱり一番ではないかなと思います。貸出率とか

色々あると思うんですが、あそこに行ったらなんか楽しいよ、気持ちいいよというように。西川さんに講演会をしていただいた時に、とっても良いところですね、休みの日にも来てみますと津山市の方が言われていました。そんな人が一人でも増えて中央だけではなく地区館も個性を發揮されて、行ってみようと思ってもらえるような場になり、本好きが増えればと思っています。

○委員長

ありがとうございました。本を好きになってもらうのがいちばんですよ。いろいろとご意見が出たと思うので、次につながるのではないのでしょうか。そろそろ事務局に戻します。

3. その他

○事務局

ありがとうございます。では次第にそって3の報告をさせていただきます。

- ① 市立図書館のシステム更新と学校図書館へのシステム導入について(資料5)
- ② 真庭校歌研究室の活動について(まにわ校歌ジャンボリー2024のチラシ)
- ③ 委員報酬の振り込みについて

4. 閉会

○事務局

閉会にあたり、委員の皆さまから一言ずつお願いします。

○内藤委員

長い間お世話になりました。図書館が活気づくことを祈って、来年からは貸出で貢献したいと思えます。ありがとうございました。

○廣瀬委員

市立図書館の役割がこの場でよくわかりすごく勉強になりました。ありがとうございました。

○山本委員

非常に勉強になりました。公共図書館を見せていただいて学校図書館に取り入れられることがたくさんあって取り入れさせていただきました。今後もよろしくお願いします。ありがとうございました。

○吉野委員

今日も図書館に来ると、1階飲食スペースのこたつにたくさん中高生がいました。寝そべってくつろいでいて、なんとなくそれが中央図書館の風景になろうかと思えました。いろんな世代の人たちにとってまずは居心地のいい場所になって、そこであれこれ話している間に本に手を伸ばしているような、そういった図書館でいいんじゃないかなと私は思います。あんまりかっちりとした、図書館とはこうあるべきみたいなのではなく、地域のみなさんも子どもたちがたくさん来ているのっていいねっていう図書館になるといいなと思います。ありがとうございました。

○松尾委員

2020年に「真庭市図書館みらい計画」の策定委員として関わらせていただきました。本当の名称は「図書館基本計画」という難しい名前なんだけど、もっと市民に伝わりやすくやわらかい名前にしようということで「みらい計画」という名前になりました。その中で図書館の動きを見てみると、みらい計画に基づきつつもオリジナリティをもって、図書館ってこんなことができるんだ、あんなことができるんだと、集まるきっかけや遊び方とかやわらかい

イメージの図書館ができあがってきたなと思います。行政には計画に基づいて動くという流れがありますが、計画をいろいろに解釈しながら市民に寄り添った図書館になっているなと感じながら、3年関わらせていただきました。さらに協議会議員としても関わらせていただいて非常に感謝しています。また引き続き関わり続けていきたいなと思います。ありがとうございました。

○浅田委員

ちょっと前に読んだ本で、ある気象学者が地震の予報を当てられないけれど地域の人はその学者を信じている、なぜかといえば、その学者は毎日火山の火口まで上り下りして調査していることを知っているからだという話がありました。

この会議に出て、図書館職員がいっぱい仕事をされていることを知りました。中央ももちろん、各図書館もそれぞれよくされている。実績がどうのこうのよりもそんな職員のみなさんを信頼しています。ありがとうございました

○大岩委員

知の拠点としてどっしりとしてアーカイブされ、いろんなコンテンツに触れられる、そして居場所としてみんなにとって安全安心の場所を同時に両立させるということが今の多様な時代のこういう居場所のあり方なのかなというのを、一緒に学ばせていただいたこの数年間だったと思っています。そういうライフスタイルといいますが、学びに向かう力というふうに学校では言いますが、そういうものを持ちながらも、共感を生むような場所であり続けるこういう場所にしばしば足を運び続けたいです。「まにわ里山留学」で都市部から4月に二人転校してくる都会の子たちとも一緒に、真庭の誇れるライフスタイルとして図書館に通ったりできるといいなと思っています。ありがとうございました。

○清友委員

今日は大満足です。自己紹介の時に本を紹介するというのを真庭の文化にしていこうというくらい、会う人会う人に、常におすすめの本を出せる覚悟で日々生きていくというのが、本の貸出にもつながっていくと思います。そういう覚悟で生きていきましょう！今日はうれしかったです。ありがとうございました。

○庄司委員

この会議に出させてもらうことになって、小さい頃は図書館とは静かにする場所でしたが、そうじゃないところになりつつある。楽しいところになっていっているんだなと勉強させていただきました。ありがとうございました。

○清友委員長

2年間お世話になりました。私はずっと図書館の中で仕事をしてきましたので、退職して外から図書館を見るということをご数年新しく体験しています。利用者として図書館に関わってみて、さらに重要な協議会にも参加させていただいたことが私にとっての財産になりました。

図書館はあってあたり前と私は思いますし、あるのに行かないっていうのは信じられないくらいの感覚だったんですけれども、そうはいっても日常生活の中ではそれぞれの理由でそういう時間が持てないということもありますよね。図書館で働いていた間にもうちょっとなんとかできたかなと今となっては後悔のほうが大きいですが、気づくことも多い。今、真庭の図書館で働いているみなさんにエールを送ります。これからも頑張っていきましょう。どうもありがとうございました

館 長：

2年間お忙しい中、時間をとって図書館のために集まっていたいて、貴重な意見をお聞かせくださりありがとうございました。

さきほど館長が…という話ありましたが、毎日現場で司書が考え、カウンターで利用者と話しをしながらいろんなことを考えて地道に仕事をしているということが基本にあり、その上で、わたしが不要不急のことをやらせもらっていることが多いのです。

大岩さんがおっしゃった知の拠点として、何かを調べるときに一緒に考えてくれる人がいる場所なんだということが基本にあって、その「考える」の中に一緒に遊ぶ、一緒に学ぶということが含まれていくことなのかなと思っています。利用してくださるみなさんが、こんな本ある？とかこんな資料がほしいですと言ってくれるその一言からここの活動がはじまっていくんじゃないかと思っています。本があるからみんなが集まって対話ができるという、ほんとの意味での居場所にこれからほんとうになっていけたらと思っています。地区館の司書含めてみんなで確認しながら、市民のみなさんと一緒にやっていたらと思っていますので、どうぞ今後ともよろしく願いいたします。

また来期お願いする方もいるかもしれません。よろしく願いします。ありがとうございます。

事務局

第2回図書館協議会を終了します。これからも引き続きご意見をいただきまして、あたたかく見守っていただけたらと思います。ありがとうございました。

以 上